Field Note

奉安殿「発見」記

藤田　庄市（写真家）

旧樺太（現ロシア南サハリン）の海外神社跡調査（2003年9月）の折、思いがけないものに巡りあった。奉安殿である（21頁写真参照）。イゴール・サマリン＝サハリン州立郷土博物館歴史記念部長に案内されるがまま、七つの奉安殿を見た。あるものは住宅街で倉庫として使用され、あるものは荒野に放置されていた。真岡（ホルムスク）のそれはエンタシスの柱をもったモダンなものだった。

初めて見たのは泊居（トマリ）であったが、奉安殿といわれ、ハッと気づいた。自分はこれまでに奉安殿の名も機能も知っていた。しかし、奉安殿を博物館などで見たことはなかったし、写真でも記憶がない。俄然、興味がわいた。日本国内の奉安殿はどんなものだったのだろうか。そんな疑問を帰国してすぐ、森端枝氏（日本神道思想・近世国学、茨城大学）にメールしたところ、即座に実物の在り場所を教示された。これにはびっくりした。中島三千男、冨井正憲両氏ともども、時を移さず森氏に導かれて見学に出かけた。

それは横浜市郊外の旧家（三澤芳夫家）の元土間に保存されていた（右下写真参照）。かつて田奈小学校にあったものだ。見て、アレッと思った。木製の神社様式である。高さ1メートル95センチ、間口1メートル7センチ、奥行き60センチ。旧樺太で見たものとは似ても似つかぬ姿である。もっともこの奉安殿、雨曝しにするのはもったいないからと、6坪ほどの建物を建ててその中に安置されていたという。では旧樺太で見た奉安殿の内部にミニ神社様式のものがあったのだろうか。それにしては狭すぎる。この問いに、ちょっとしたヒントがないわけではない。サマリン論文[※1]によると、ヨーロッパ建築様式で造られてきた南樺太の奉安殿は、1930年を境に神社様式に変容したというのである。一方、田奈小学校の奉安殿は1933年か1934年頃に地元の腕のいい棟梁が造ったとのこと[※2]。となると、皇国史観と国家権力が緊密に結びつく時代[※3]の風潮が、奉安殿の神社様式化を促し、その結果、この奉安殿やサマリン論文の該当物（未見）になったのであろうか。

ところで、旧家に奉安殿が残った理由である。これはひとえに先代当主・三澤重元氏（故人。元横浜市議）の才覚による。敗戦の折、田奈小学校の教師達は「天皇を神格化し、武運長久と米英撃滅を祈願した奉安殿を残しておいては、進駐してくるマッカーサーからどんな難くせをつけられるか判らないし、ひどい罰を科せられるに違いないと恐れおののいていた[※4]」。そこで奉安殿を燃やしてしまおうということになった。その準備のさなか、ちょうど通りかかったのが三澤氏である。「いくら敗れたりとはいえ、神殿を燃すのは気がとがめる。そのうえ、作品としても立派な造りのものだ[※5]」、灰にするのは惜しいと、三澤氏が引き取ったというわけだ。いい度胸である。

三澤氏、かといって皇国史観を持続していたわけではない。自然体で保存したまでのことで、いずれ庭に出して稲荷でも祀ろうかと考えていた。それも実現しないうちに逝ってしまい、奉安殿は元の土間に相変わらず鎮座坐しましている。歴史の証人、有形文化財として価値があると思うのだが。

※1 イゴール・サマリン「南サハリンにおける天皇制イデオロギーの物質的遺構」（『サハリン州立郷土誌博物館通報』第5号・1998年）。ムカイダイス氏（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科院生）の試訳による
※2 三澤重元『想うままに』自費出版。1982年
※3 永原慶二『皇国史観』岩波ブックレット。1983年
※4 ※2に同じ　　※5 ※2に同じ

●調査にあたり、三澤芳夫氏には格別の御配慮を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

奉安殿　アジア太平洋戦争末期には、都市部の学校の「御真影」が疎開してきた。

旧樺太の元奉安殿

今回の調査において七件の元奉安殿を調査した。すべてコンクリート構造であり、泊居（トマリ）のものは高さ3メートル、間口2メートル30センチ、奥行き2メートル90センチの大きさを有していたが、他の6件もほぼそれに準じる規模であった。6件について写真で紹介をする。尚、南サハリンの日本統治下における近代建築についての調査研究（神社や奉安殿を含む）は、北海道大学の角幸博、井潤裕らによって、精力的に進められている。最も新しいものに井潤裕、角幸博「ON THE INVESTIGATION OF JAPANESE HISTORIC BUILDINGS IN YUZHNO-SAKHLINSK」（日本建築学会計画系論文集、第571号、2003年9月）がある。

旧泊居町（現トマリ）

旧泊居町大字追手

旧野田町（現チェーホフ）

旧真岡町（現ホルムスク）

旧敷香（現ホロナイスク）にあった奉安殿（写真右）。
現在はユジノサハリンスク市の郷土博物館の庭に展示

旧大泊町（現コルサコフ）